

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 4 月 30 日現在

機関番号：34428

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520638

研究課題名（和文）多読が情意面および学習面に与える影響—日記研究

研究課題名（英文）Effects of Extensive Reading on Affective and Learning Variables  
—A Diary Study

研究代表者 松田 早恵（MATSUDA SAE）

摂南大学・外国語学部・准教授

研究者番号：50388641

## 研究成果の概要（和文）：

本研究では、大学生が記録した学習（多読）日記を主な研究材料に、多読が言語面および情意面にもたらす影響を探った。その結果、学生は多読を通して様々なリーディング方略を試していることがわかった。また、多読への関心や学習目標（オリエンテーション）が時と共に変化する様子も観察された。

## 研究成果の概要（英文）：

This study explores extensive reading (ER) diaries that learners kept throughout a period of time and attempted to identify how learners are actually reading. A close look at learners' diaries revealed various types of individual differences—learning styles, reading strategies, motivation, orientation, and anxiety—provoked by extensive reading experiences. It was also observed that those individual differences changed over time. Although the students recognized the importance of ER, they shifted their attention to more pressing assignments as time went on.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
総計	1500,000	450,000	1950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、外国語教育、英語教育一般

キーワード：英語教育、日記研究、多読

## 1. 研究開始当初の背景

多読研究は近年盛んになってきてはいるが、実践報告および量的研究が多く、学習者がどのような読み方をしているかを探った質的研究はまだ少ない。多読の影響には数値

には現れないものも含まれるはずなので、本研究では、多読日記や学習日記を通して学習者の内面にも光を当て、そこに現れる変化（または効果）を探ろうと試みた。多読初心

者は「たくさん読む」経験を重ねるに従いどう感じるのか。「リーディングに対する苦手意識」を取り除くことはできるのか。一方、既にある程度の量を読んでいる学習者は、どのような目標を持って読み進めるのか。不安は自信に変わるのかなどを観察することにした。

さらに、内容を楽しみ、先を予測しながら読む多読の経験を積めば、前後関係を考える必要がある「段落並べ替えテスト」や行間を読むことを要求される「文学作品の読解テスト」で伸びが見られるのではないかと考えた。

## 2. 研究の目的

本研究では、様々な方法で多読による情意面への影響および学習効果を探ることを目的とした。

## 3. 研究の方法

### (1) 多読日記・学習日記

第1の方法は、多読による情意面への影響を日記から汲み取ろうとするものである。学習日記は、学習者がその時点で重要だとみなしている事柄を見出すのに有効だと考えられており、言語学習の隠れた側面を発見する手法としても用いられている。今回は、学生に学期中の多読日記・学習日記を記録させ毎週の提出を課した。形式指定の有無や教員からのフィードバックの有無など様々な様式を試みた。

### (2) 質問紙

第2の方法は、多読導入前後の情意面における変化を質問紙調査で探るものである。具体的には、外国語リーディング不安に関する質問紙 (Saito, Garza, Horwitz, 1999) を英語学習者用に修正したものと読解方略に関する質問紙 (Takeuchi & Ikeda, 1999) を用いた。

### (3) 客観テスト

第3の方法では、多読量と客観データの相関関係を調査するために、以下のようなテストを実施した。

### ① 大学センター試験タイプテスト

【Pre-test】2011年度春学期初めに実施

Test A: コロケーション

大学センター試験第2問Aより抜粋  
計30問

Test B: 大学センター試験第3問と第6問を  
抜粋 計23問

- 1)類推 (4問)
- 2)要約 (3問)
- 3)空所補充 (3問)
- 4)長文 (13問)

【Post-test】2011年度秋学期末に実施

Test A: コロケーション

Pre-testと同じものを使用

Test C: 大学センター試験第3問と第6問を  
抜粋 計23問

- 1)類推 (4問)
- 2)要約 (3問)
- 3)空所補充 (3問)
- 4)長文 (13問)

### ② EPER テスト

pre-test, post-test として、2011年度秋学期、2012年度秋学期に実施。

EPER Test とは、エジンバラ大学多読研究チームが開発したクローズテストである。

## 4. 研究成果

### (1) 日記研究

表1は、3年間に試みた日記の様式である。

表1：日記データ

	年度学期	媒体	形式	コメント	人数
1	2010 秋	A4 紙	多読	なし	31
2	2011 春秋	ノート	自由	あり	51
3	2011 秋	A4 紙	多読	なし	21
4	2012 春	冊子	学習	あり	46
5	2012 秋	A4 紙	多読	なし	31

### 日記データ 1 【2010 年度秋学期】

表 1 の 1 の日記データを分析した。全体としては、日記をよく提出していた学生がたくさん読んでいたとは言えないが、提出が 9 回以下（60%）の学生に読書記録表の未提出者が多かった。

毎回提出のあった学生 A と学生 B の日記を分析したところ、多読活動を通して彼らが様々な読解方略を試していたことがわかった。先行研究が論じているように、読解方略の使用が時間やタスクに応じて変化することを支持する結果であった。また、2 人の読み方には個人差があることも明らかになった。

内容を楽しもうとしている学生 A に比べると、学生 B は単語や文法に意識がいて、内容よりも言語的な理解度を常に確認しながら読み進めているようであった。黛・宮津（2012）が言う「上昇グループ」の読み方をしているのが学生 A で、「下降グループ」の読み方をしているのが学生 B といったところであった。学生 A は前期に 73,973 語を読んでいたが、学生 B は 3,719 語しか読んでいなかったことから、この前期の経験の差が後期の読み方の差に繋がったとも考えられる。

学生 A の日記からは様々な読解方略が明らかになり、Takeuchi & Ikeda (1999) が分類した読解方略の中でも 10 種類以上が確認できた。一方学生 B の日記からは具体的な方略に関する記述は無かった。しかし、単語や文法に注意を向けながら読んでいたことは伺えるので、敢えて Takeuchi & Ikeda (1999) の方略に当てはめるならば、「句・節等の文法的切れ目を意識して英文を読み進めていく (No.1)」「文中の過去・現在等の動詞の時制に着目して読み進めていく (No.3)」「文章中の単語の意味を一つ一つ理

解しようとする (No.4)」「与えられた英文を日本語に訳しながら読み進めていく (No.5)」「文の主語、目的語がどれであるか、あるいは文型がどうなっているかなど、文の構造を意識して読み進めていく (No.8)」などを試みていた可能性はある。

### 日記データ 4 【2012 年度春学期】

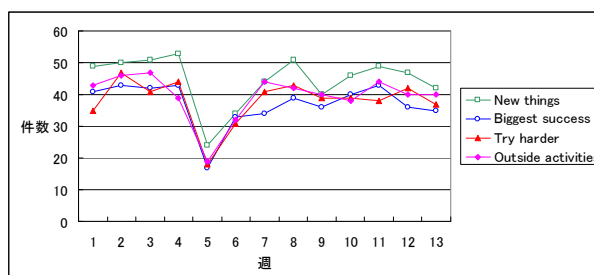
表 1 の 4 の日記データを基に、大学 1 年生の多読への関心、学習目標（オリエンテーション）を分析した。日記研究は一般化が難しいと言われているが、1 年生 46 名分の学習日記を分析することで、大学 1 年生に特徴的な傾向を見出すことができるかを探った。表 2 は、日記の提出回数と多読量を示したものである。

表 2：日記提出率と多読量

	提出回数	読了語数	読了冊数	TOEIC
平均	12.3	47,984	30	373.5
最大	14	181,275	85	540
最小	10	1,310	9	215

記載された内容を分類・分析してみたところ、指定形式の 5 つの項目のうち Comments を除いた件数の推移は図 1 のようになった。Comments には Other のカテゴリーに分類される件数が多く、英語学習に関係のない記述が目立ったので、図からは省いた。

図 1：項目別件数の推移



こうしてみると、どの項目も同じようなパ

ターンを描いていることがわかる。つまり、総件数に若干の昇降が見られるものの、学生は一学期間に渡って、どの項目にも記録を続けたということである。5週目と6週目で落ち込んだのは、ゴールデンウィーク前後に提出が乱れたためである。全体的には、新しく学んだことの記述が若干多めで、成功に関する報告が少なめとなっている。

学期末に集めた日記の冊子にまずざっと目を通し、どのようなカテゴリが表れたかを拾い出した。その結果、ほとんどが次の14種類のカテゴリに入ることがわかった。1) 課題（他の授業も含めた課題・宿題・学習に関する記述）、2) 映画、3) 文法、4) 語彙、5) リスニング、6) 音楽、7) なし（「やっていない」、「何もない」などの記述）、8) 発音、9) リーディング、10) スピーキング、11) テスト（TOEIC や英検など外部試験に関する記述）、12) 語彙、13) ライティング、14) その他（上記のカテゴリのどれにも属さない、その他の記述）。カテゴリの不明瞭なもの（例えば、「学部の English Party に参加した」など）や英語学習とは関係のないもの（アルバイトに関する記述など）のために「その他」のカテゴリを作った。

次に、再び全ての学習日記を細かく見ているとき、記録された一文ごとにマークを入れている。ただし、同じ週の同じ項目の中に同一の事柄に関する記載が二文以上ある場合はそれを一くくりとして、該当のコードを一度だけカウントした。例えば、同じ映画に関するコメントが Outside activities に2文以上あっても件数は一つとして数えたが、さらに同じ映画に関して他の項目（Comments など）で言及している場合は、各項目で1回ずつ数えた。表3は、頻出カテゴリを示し、図2はその中のリーディングに関する記述件数の推移を表している。

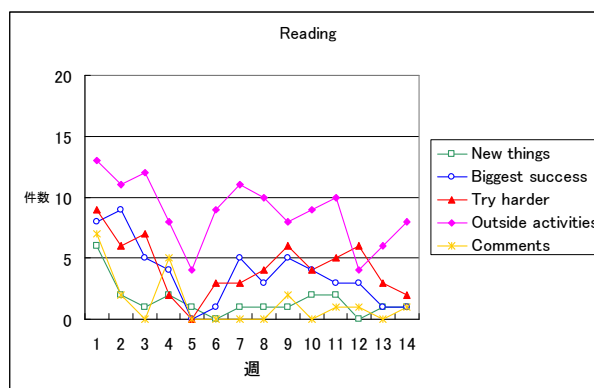
表3：項目別頻出カテゴリ順位

(括弧内は件数)

	New Things	Biggest Success	Try Harder	Outside Activities	Comments
1	語彙 (272)	その他 (165)	課題 (165)	映画 (166)	その他 (258)
2	文法 (123)	課題 (105)	その他 (89)	リーディング (123)	課題 (39)
3	イデオロム (86)	なし(64)	語彙 (75)	音楽 (93)	映画 (30)
4	課題 (46)	語彙 (56)	リーディング (60)	なし(54)	リーディング (19)
5	発音 (36)	リーディング (52)	リスニング (30)	その他 (19)	テスト (17)
6	リーディング (21)	スピーキング (21)	テスト (29)	課題 (13)	スピーキング (13)
7	なし(18)	リスニング (15)	スピーキング (25)	リスニング (13)	語彙 (8)
8	リスニング (12)	テスト (13)	映画 (22)	テスト (8)	なし(6)

一般的には学生にとって優先順位の低い Reading だが、今回のカテゴリ別件数比較では上位に入った。

図2：リーディングに関する記述件数の推移



初回の授業で多読の意義と方法を説明したが、多読の経験がない学生にとってはその目新しさが少し効いたようである。日記からは、何人かが「本をたくさん読むことは英語の力をつけるのに良いことだ」と認識したことがわかった。特に **Outside activities** の項目に **Reading** の記述が多かったのは、課外多読を奨励したからだと思われる。

ただ、やはり大学1年生の最重要関心事は日々の課題である。Matsuda (2004) からわかるように、学生はまず **Academic success** を優先するのである。高校までとは大きく異なるカリキュラムにおいて、大学1年生にとっては第二外国語を含む様々なクラスは新しい経験であり、その課題に振り回されるというのが現状である。今回も「小テストでいい点が取れた」、「音声学のテストがある」「レポートの書き方がわからない」、「中国語のテストがあるので頑張りたい」、「プレゼンテーションが無事に終わった」など他のクラスの記述が多かった。また、学期末が近づくにつれて、不安とあせりが高まっていくこともわかった。学生を長期間多読に集中させるためには、このあたりのサポートも必要となってくる。

## (2) 質問紙

2011 年度春学期の初めと秋学期の最後は、外国語におけるリーディング不安と読解方略に関する質問紙調査を実施した。グループに特徴的な傾向が見出せるか、今後の分析が必要である。

## (3) 客観テスト

### ① 大学センター試験タイプ

2011 年度春学期の初めと秋学期の最後は、大学センター試験タイプの客観テストを実施した。結果は、表 3 の通りである。

表 3: コロケーション・読解テスト結果

		問題数	配点	平均	標準偏差
コロケー	pre	30	60	27.2	7.4
ション	post	30	60	30.9	7.8
読解	pre	23	119	61.3	16.3
	post	23	119	70.5	19.5
(読解 類推	pre	4	16	8.7	4.5
内訳)	post	4	16	8.1	4.5
	要約	3	15	8.5	4.3
	post	3	15	6.8	4.5
	空所	3	15	7.5	5.2
	補充	3	15	7.6	4.4
	長文	13	73	36.7	12.1
	post	13	73	47.9	13.7

pre-test と post-test では、コロケーションおよび読解（長文）にスコアの向上が見られたが、統計的な有意差は見られず、また、多読量（語数、冊数）と客観テストの間には相関関係は見られなかった。（紙幅の制約上、多読量の表は割愛。）

## ② EPER テスト

2011 年度秋学期と 2012 年度秋学期には、多読クラスの 2 週目と 14 週目に EPER テストを実施した。表 4 は、両年の平均スコアを示したものである。

表 4: EPER テスト結果

	人 数	EPER		語数	冊数	TOEIC
		pre	post			
2011	21	39.9	47.9	72,389	66.0	367.5
2012	31	37.3	47.1	66,078	103.9	387.1

pre test と post test 間には、T test による有意差および読書量との相関は見られなかった。

日記データ 1 から一つの明るい発見としては、学生 B が最後に「興味のある分野の

本を読むとはかどる」と気づいた点である。学生 A も、「来週頑張りたいこと」の最後に「ストーリーが面白ければどんどん読み進めていけるので、良い本を探して読んでいきたい」と書いている。Hayashi (1999) は、タスクの難易度と文法・語彙、背景知識の有無に有意な相関を見出したが、タスクの難易度と興味については相関は見られなかったと報告している。つまり、学生は内容に興味を持てれば、語彙や文法の難しさはそれほど気にしないということであったが、今回の 2 人のコメントは、その研究結果を支持していると言えよう。また、数々の研究が示唆しているように、絵や背景知識が読解の助けになることは、学生 A のコメントが示している。このように、学生は、多読という機会を与えられれば数々の発見をしてくれる。

一方、日記データ 4 からは、多読の妨げになり得るものも読み取れた。今回の大学 1 年生は、新生活とハードスケジュール (勉強とアルバイト) による疲れ、睡眠不足、無気力、体調不良、不安感などを訴えていた。中には、軽うつ状態に陥っているのではと疑うような記述もあった。また、読みたいとは思っていても、切羽詰った他の課題に追われて、段々読めなくなっていく様子も伺えた。語学の授業が多い外国語学部のカリキュラムでは、必然的にテストの回数が多くなる。最後に 1 度だけ大きな試験 (定期試験) をするタイプの授業は少なく、こまめに小テストが実施され、課題も多い。学生が記述していただだけでも、英語学、音声学、プレゼンテーション、レポート、暗誦テスト、単語テスト、小テスト、英語以外の外国語のテストなど、学生はテスト・課題攻めであった。

今回は時間の制約から細かく見ることはできなかったが、学生がどのような課題 (活動) に一番時間とエネルギーを取られて

いるのかをさらに分析することも必要かもしれない。また、特に Comments 項目に多く表れた「英語学習以外に関する記述」を分析すれば、さらに興味深い発見があるとも考えられる。さらに、日記と同時に提出された読書記録にも何らかの傾向が見られるかもしれない。学生が「興味の持てる本」、「面白くてのめり込む本」にできるだけ早く出会うことができれば、その「楽しく読めた」という成功体験が自発的かつ継続的な読書に繋がるであろう。

まだ未分析のデータもあるので、今後も様々な角度から学生の読みを探っていきたい。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 4 件)

①松田早恵、2012、多読日記に表れた学習者の読解方略に関する一考察、日本多読学会紀要、査読有、7 巻、41-59

②松田早恵、2012、From Dependence to Autonomy—Extensive Reading Marathons、*Extensive Reading World Congress Proceedings*、Vol. 1、26-29、査読有  
<http://erfoundation.org/proceedings/erwc1-Matsuda.pdf>

③松田早恵、2012、多読最新事情：摂南大学の現状と比較して、*Setsunan Journal of English Education*、Vol. 6、65-89、査読無

④松田早恵、2011、Creating Opportunities to Read Extensively、*Journal of Literature in Education*、Vol. 3、20-29、査読有

[学会発表] (計 2 件)

①松田早恵、2011 年 9 月 4 日、From Dependence to Autonomy: Extensive Reading Marathons、1st Extensive Reading World Congress、京都産業大学

②松田早恵、2011 年 9 月 2 日、多読マラソン 4 年間の試みを振り返って—成果と今後の課題、大学英語教育学会 (JACET) 第 50 回記念国際大会、西南学院大学

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

松田 早恵 (MATSUDA SAE)

研究者番号：50388641